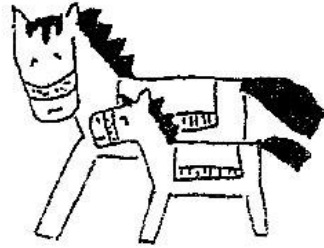


♪  
お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと

29年 6月 NO.271



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

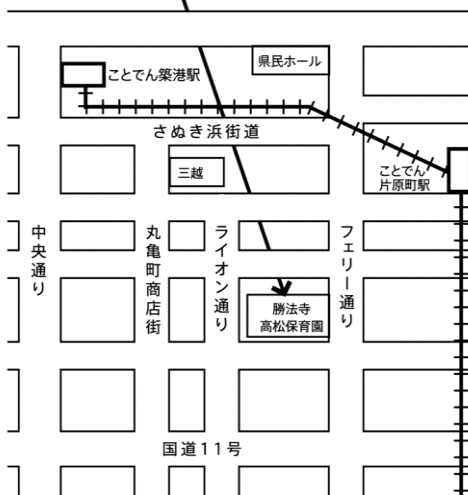
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		<b>6月の主な活動</b>		～お気軽にどうぞ～
6月 17日	土	体験保育 10:00～12:00	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
6月 17日	土	おとなアート 14:00～16:00	おとなアート 14:00～16:00	食材の「アジの開き」を観察し、干物の おもしろさを表現します。(予約要 6/14まで)
6月 23日	金	おはなしの会 10:00～11:30	おはなしの会 10:00～11:30	「心も体も元気になーれ」をテーマに大型絵本や わらべ唄もあります。どなたでもどうぞ。
6月 23日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師(小児科)とゆっくり 相談できます。(予約要)
6月 24日	土	体験保育 10:00～12:00	体験保育 10:00～12:00	出産を予定の方もどうぞ 育児体験においで下さい。
6月 27日	火	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	安全・安心ネット指導員からこどもの スマートフォンやゲーム機についての正しい 使い方をお聞きし、フリートークしましょう。

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して  
いますので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00  
しつけや子育てについての悩み、保育園生活  
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集③  
一空のかあさま・上  
より

大人はきつとおもっているよ、  
子供はものをかんがえないと、  
だから、私が私の舟で、  
やっとみつけたちいさな島の、  
お城の門をくぐったところ、  
大人はいきなり蓄音機をかける。  
私はそれを、きかないように、  
話のあとをつづけるけれど、  
唄はこっそりはいつて来ては、  
島もお城もぬすんでしまう。

蓄音機(ちくおんき)





# 千の風と千の花

新井 満（「千の風になって」作曲）

神戸は第二のふるさとである。新婚時代をすごし、子供も生まれ、成長した。私が作家や作詞作曲家になれたのも、この町で暮らし様々な文化的な刺激をうけたおかげだと思っている。神戸には恩義があるのだ。

東京に引っ越して、しばらくしてから、大地震が起きた。死者約 6400 人の中には私の友人や知人もたくさん入っている。お見舞いと応援に駆けつけたのはいうまでもない。昔の住所にも行ってみた。一番思い出深い場所、東灘区の「森市場」のあたりを訪れ、息を呑んだ。町は消えていた。昔住んでいた4階建てマンションはペンションに潰れ、住民のほとんどが圧死したという。瓦礫の山の前に立ち、私は天を仰ぎ全身を震わせながら心の中で叫んだ。

〈よりによって、なぜ神戸なのだ。神さまはなんて不公平なのだ。なぜ、このような試練を課そうとするのだ！〉

はっきりしたことはただ一つ。もし私がこの建物にまだ住んでいたなら、間違いなく死んでいただろう、ということ。死者と生者とは、ほとんど紙一重なのである。

あれから10年が過ぎた。今、人と防災未来センター・ひと未来館（神戸市中央区）では“いのちの共生と再生”をテーマに、これまで国内で発表された無数の詩作品の中から24篇を選び、パネル展示している。金子みすゞや谷川俊太郎といった詩人たちとともに私の詩も展示されているのだが、その作品は作詞者不明の英語詩を翻訳したものである。写真詩集「千の風になって」（講談社）の中から、その一部を次に引用してみよう。

私のお墓の前で 泣かないでください／そこに私はいません 死んでなんかいません  
千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています  
秋には光になって 畑にふりそそぐ 冬はダイヤのように きれめく雪になる  
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる／夜は星になって あなたを見守る  
千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています



何度読んでも不思議な詩だと思う。自分は死んだけれど、今は風になってあなたのすぐ傍そばにいるよ、だから泣かないでと、死者が生者を慰め励ましているのだから。

元々この詩は、妻を癌がんで亡くした親友を慰めるために翻訳したのだった。しかし病気であろうと地震であろうと、大切な人を亡くした人間の悲しみに差はない。「死とは再生すること。いのちは永遠に不滅」と訴えるこの詩によって、神戸の人々の悲しみが少しでもいやされるなら、私は本望である。

そんな折も折、新潟県中越地震が起きた。1か月後、私は被災地へ、義援金とは別にあるものを送った。北海道は七飯町ななえのカーネーション、千本である。同町の花弁園芸農家は昨年9月、台風18号で大被害を受けた。ようやく復興した同町の特産物を購入し、山古志村などに送ったわけである。両方の被災地から喜ばれたが、それにしてもなぜ私は、パンでも水でもなく、花なんか送ったりしたのか。次にその理由を書く。

実は、私のふるさととは新潟市なのである。今から40年前、1964年6月16日、新潟地方を大地震が襲った。そのとき私は同市内にいて、高校3年生であった。稲妻状に割れる大地、土台を見せて倒壊する建物、落橋するう昭和大橋、爆発炎上する原油タンク群、そして津波。〈ああ、こういう風景を地獄というのだな…。死にもの狂いで逃げたが、あの1日だけで、一生分の恐怖を味わった。〉

幸い、怪我けがはなかったが、心に重傷を負ってしまった。トラウマである。その後、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に悩んだ。不安と不眠、日に何度も浮上する悪夢の記憶…。1年が過ぎ大学入学直後、突然、十二指腸に穴があき、出血。救急病院で手術を受け、一命は取り止めたが、やむをえず休学した。

翌春、復学した。しかし、生きる気力がなかった。そういう私がどう立ち直ったか。

ある日、土手の上を散歩していると、ふと足が止まった。土手いっぱい黄色いレンギョウの花が咲き乱れている。

〈なんという美しさだろう…〉

けなげに咲いている小さいのちの形を見ているうちに、涙があふれてきた。皮肉ではないか。私の心をズタズタに傷つけたのと同じ“自然”が、今後はいやしてくれているのである。生ける屍しかばね状態にあった19歳の私が、再生への第一歩を踏み出したのはあの瞬間だったと思う。

〈生きよう。もっともっと生きよう。死んだ人の分まで、生きてやろう…!〉

(抜萃のつづり その65—平成17.1.15)

☆新井 満インタビュー（朝日新聞）

—「千の風になって」が、大沼国定公園（北海道七飯町）で誕生したいきさつから聞かせてください。

ふるさと新潟市の幼友達に川上君という弁護士がいて、奥さんの桂子さんが48歳でがんで亡くなった。送られてきた追悼文集に不思議な詩が紹介されていて、そのルーツをたどると作者不詳の12行の英語詩に出会ったのがきっかけです。「死者が生者を慰める」という発想に驚き、追悼の曲にして贈ろうと考えた。ところが、どうしてもうまく翻訳できません。

3年たった2000年の夏、大沼の別荘を出て森を散歩しながらその英語詩を朗読していたら、ゴーッと大風が吹いてきた。森の中を風が通り、木々が揺れることで、風の姿を見ることができた。その瞬間、ああそうか、あの詩は風を主人公に自由訳をすればいいんだ、とわかったんです。

その後、作曲し歌唱したCDの私家盤を30枚だけ作りました。そのうちの1枚が2003年8月、朝日新聞の天声人語に紹介されて、この歌は全国に広がりました。

—「千の風」が発信するメッセージは何でしょうか。

まず、死は「一卷の終わり」ではなくて再生することだ、ということ。命は永遠に不滅で、風や鳥や光になって、さらに生き続ける。死者との絆が、復活したんです。

二つ目は、そのように死のイメージを根底から変えてしまった歌を聞いた私たちは、どういう態度をとればいいのか。歌詞には「泣かないでください」とあるが、泣きたい時には一生分の涙を流すくらい泣いた方がいい。でも、その後はすっきりと立ち上がり、死者の分まで一生懸命生きてあげることです。それば、死者に対する最大の供養になるのではないか。

最後に、では死んだらどうするか。これについても、あの歌は明快に答えている。命は不滅だと申し上げたが、元気な私たちも、やがて人間としての役割を終える。死んだら風や星になって、天上から後に残してきた人々を見守ってあげたらいい、と言っています。

—「千の風基金」を設け寄付活動されていますね。

CDや関連本の印税が入ってくると、できる限り基金に送金しています。基金の代表は川上君で、亡くなった桂子さんが相談員をしていた「いのちの電話」をはじめ、桂子さんが生きていたら手をさしのべたであろう社会貢献活動を、応援しています。

